



◎幼きイエス会（旧サン・モール修道会）を基に、福岡女子商業高校として開校。1954（昭和29）年に小学校を開校し、幼・小・中・高の総合学園となる。校訓は「徳においては純真に」「義務においては堅実に」。国際交流や国際理解教育が盛んで、世界13か国、国内外に約150校の姉妹校がある。

設立

1933（昭和8）年

形態

全日制／普通科／女子

生徒数

1学年約200人（昨年度卒業生147人）

11年度入試合格実績（現浪計）

国公立大は、東京大、京都大、九州大などに24人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、福岡大などに延べ228人が合格。海外の大学には、ハーバード大やペンシルベニア大などに延べ22人が合格。

住所

〒810-0027  
福岡県福岡市中央区御所ヶ谷7-1

電話

092-531-0438

Web Site

<http://www.fukuokafutaba.ed.jp/>

福岡県・私立  
福岡雙葉中学・高校

進学実績向上

# 「志」を重視する教育で 基礎学力の定着と 進路意識の向上を図る

変革のステップ

背景

◎女子教育に定評はあったが、進路指導は教師個々に任せられ、指導の方向性がそろっていなかった

STEP 1

実践

◎「グローバルシティズン」を目指す人物像として明確化し、共有。生徒の志を育むと共に、学力向上を図る

STEP 2

成果

◎生徒が具体的な将来像を描けるようになり、受験は通過点と考えられるように。上位層から下位層まで学力が向上

STEP 3

指導の方向をそろえるために  
育てたい人物像を明確化し共有

福岡市の中心部にある福岡雙葉中学・高校は、キリスト教精神に基づいた教育を実践する私立の女子校だ。中高一貫コースに加え、高校からの3年課程のコースもあり、約1100人の生徒が学んでいる。

同校は、以前から女子教育について地域からの厚い信頼が寄せられていたが、進路指導はそれほど組織的に行われてこなかった。その体制が、2008年度に始まった教育改革によって大きく変わりつつある。大林興一校長は次のように話す。

「社会の急速な変化を踏まえると、本校の伝統である人格教育は不変の教育として続ける一方で、時代の変化に対応した『本物の学力』を育てていく必要性を感じています。そのような素質を備えた人物を『グローバルシティズン』という言葉で表し、13年度に迎える創立80周年を目指して教育改革を進めていきます」

教師は熱意を持って教育に当たっているが、それぞれの指導が「点」になってしまい、「線」としてつながらないという課題があった。「グローバルシティズン」を設定した背景には、教師間で理想的な人物像を共有して、指導のベクトルをそろえたいという考えもあった。

## 将来への高い志や ビジョンを育む「志の教育」

同校は「グローバルシティズン」を「神の恵みに感謝して、地球社会の一員であることを自覚し行動する人」と定義する。このような生徒



福岡雙葉中学・高校校長  
**大林興一** Obayashi Kotchi

教職歴50年。同校に赴任して6年目。「常に生徒を中心に据えての教育の在り方を追求し、改善し続ける」



福岡雙葉中学・高校  
**長祐子** Osa Yuko

教職歴27年。同校に赴任して17年目。進路指導部長。「未来を想え！ We shall go together!」生徒の能力開発を常に目指す



福岡雙葉中学・高校  
**田島徳己** Tashima Tokumi

教職歴・赴任歴共に3年。進路指導部副部長。「長空は白雲が飛ぶを妨げず」生徒の可能性を最大限に伸ばす



福岡雙葉中学・高校  
**中村道彦** Nakamura Michiko

教職歴3年。同校に赴任して1年目。進路指導部。「将来の自己実現に向けて、「本気でやる子」を育てる」



福岡雙葉中学・高校  
**中尾祐美子** Nakao Yumiko

教職歴10年。同校に赴任して1年目。進路指導部。「目標を持って努力し続けることの大切さを伝えたい」

を育てるために、中高一貫コースでは、中学1年生は「基礎期」として基本的な生活習慣の確立、中学2・3年生は「充実期」として自主的行動の確立、高校1・2年生は「発展期」として自律の実践、高校3年生は「完成期」として進路対策に重点を置く。3年課程では、高校1年生が「基礎期」、2年生が「発展期」、3年生が「完成期」に当たる。今回は、主に3年課程の内容を中心に取り上げる（P.22図）。

「グローバルシティズン」を育てる教育は、正課の学習活動に加え、「志の教育」が中心となる。進路指導部長の長祐子先生は、次のように説明する。

『「大学入試で終わりの人」ではなく、『大学入試からの人』になってほしいと考え、高い志や具体的なビジョンを育む教育プログラム『志の教育』を行っています。大学入試はゴールではなく、グローバルシティズンに到達するための成長のきっかけとして『利用』すべきものだと考えています』

「志の教育」では、高校1年生は「自己理解」として、自己の職業観を確立させ、その手前にある大学・学部・学科を調べることで、高い志を持たせ、夢の実現に向けた気概を養う。2年生は「自己啓発」として、職業や学問領域を探求し、職場や大学などを自分の目で確かめる。3年生は「自己実現」として、目指す大学・学部に向かって努力し、進路を実現させる。

## 「未来からの反射」を通して 現在の自分を見つめ直す

「志の教育」では、将来の理想の姿から現在の自分はどうかあるべきかを考え、「未来からの反射」という視点を特に重視している。高校卒業10年後、20年後となる、28歳、38歳の自分を具体的に想像する機会を何度も設けている。

その一つは、卒業生による学部・学科ガイダンスや職業ガイダンスなどだ。職業ガイダンスでは、弁護士や医師、獣医師、アナウンサーなど、さまざまな分野で活躍する28歳や38歳に近い年齢の卒業生を招き、仕事内容やキャリアについて話してもらう。生徒は同じ校舎で学んだ卒業生を身近な存在と感じ、自分の将来と重ね合わせて講演内容に耳を傾け、将来像を具体的にイメージする。

「二例ですが、臓器移植コーディネーターを務める卒業生が講演をした時は、生徒たちの議論が盛り上がり、講演した卒業生も生徒たちの熱意や医学への関心の高さに驚くほどでした。さまざまな現場で働く人たちの生の声を聞き、社会人がどのような視点で物事を見ているのかを、出来るだけ早い時期に体感してほしいと企画しました」（長先生）

夏休み前と秋の年2回、大学教員を招いての出前講義も実施する。理学、工学、医療保健、人文科学、生活科学などの9分野があり、出前

高校3年間の各学年での目標と主な活動

		基礎期	発展期	完成期
学年		1年生	2年生	3年生
高い学力	目標	自主的行動の確立 社会と関わる	自律の実践 進路から進学へ・リーダーシップ	進路対策 自己実現
	学習目標	基礎学力を身につける	学力を蓄え本物にする	実践する力を蓄える
	学習活動	現代世界の学び	日本文化の学び (奈良・京都旅行)	進学に向けて 自己管理能力の完成
	狙い	将来の自分を描き、可能性を高めていくための、 活動の幅を広げていく		グローバルシテイズンの第1歩 としての自己実現を目指す
高い志	志の教育	自己理解	自己啓発	自己実現
		<調査> 「大学の学部・学科について 調べる」	<行動> 「学問領域を探索し、自分の 目で大学を確かめる」	<実現> 「目指す大学・学部に向かい 努力し、進路を実現させる」
		<ul style="list-style-type: none"> <li>●興味関心のある学問領域を 探索する(レポート)</li> <li>●インターネットを利用し、学 部学科の探索(レポート)</li> <li>●作文コンクール応募</li> <li>●ディベート</li> <li>●出前講義、講演会への参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●志望の学部・学科・大学を明 確にする</li> <li>●出前講義、講演会、大学講義 等への参加</li> <li>●オープンキャンパスへの参加</li> <li>●作文コンクール応募</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●実践的な課外講座</li> <li>●大学説明会への参加</li> <li>●出前講義、講演会への参加</li> </ul>

高校3年間の指導の目標を示している。高いコミュニケーション力と豊かな人間性を育み、同時に志を持てるような活動を行う \*学校資料を基に編集部で作成

講義は分野ごとに異なる日程で行われるので、志望分野以外の授業も受けることが可能だ。また、興味・関心の変化に対応するため、教師と相談の上、分野は随時変更することも出来る。同校には、留学生が各学年に常時5〜6人在籍、帰国子女は現在23人在籍している。一般生徒との交流も盛んで、海外にも視野が向きやす

振る舞い、話し方などが目に見えて変化するほか、大学の志望理由書も、『人の役に立ちたい』といった漠然とした内容から、『こういう思いがあるので、この学部に進みたい』などと非常に具体的にになります。そうした生徒の変容を見るたびに、目標を持つことの力の大きさを実感します」

い環境にある。そのため、「志の教育」の一つとして英語スピーチコンテストを実施するなど、語学力やコミュニケーション力を高めながら、海外の大学への進学も積極的に支援する。11年度入試では、ハーバード大をはじめ、22人の生徒が海外の大学に合格した。他にも、作文コンクールへの応募、オープンキャンパスへの参加などを通じて、生徒のキャリア意識を高めている。更に、3年生では生徒の志を高める上で欠かせないのがきめ細かな個別指導だ。進路指導部副部長の田島徳己先生が言う。「教師との対話を繰り返すことで自分の可能性に気づき、明確な目標が出来る、生徒は大きく変わります。姿勢や立ち居

90分間の「課外講座」で基礎学力や集中力を養う

志の実現には、通過点として志望大に合格する必要がある。そのための学力向上策の一つが、11年度に本格的に導入した「課外講座」だ。各科目週1回、放課後に実施し、1年生は数学と古典、2年生は数学と理科、3年生は「センター試験対策」「〇〇大学対策」など大学受験に対応した科目を設けている。講義時間は90分間と、通常行う授業の倍の長さだ。

「最初は時間が長いと感じる生徒もいますが、特に集中力が途切れる様子は見られませんでした。90分間集中して取り組めるようになると学習に対する基礎体力が付き、45分間の授業は短いと感じるようになります。以前よりも授業に集中できるようになり、入試での集中力も養われると考えています」(田島先生) 講座は基礎と応用がある。受講は希望制だが、受講者が80人を超える講座もあるという。進路指導部の中村道彦先生は次のように話す。「理数系科目に苦手意識を持つ生徒も多く、それだけの理由で進路を選択しがちです。現在、文系2クラス、理系と医歯薬系で3クラスありますが、課外講座では数学や理科をより多く取り上げ、基礎学力を定着させると共に、考え方に重点を置いて指導しています」

課外講座では、学校独自の教材を使い、考え

る力の育成に努める。例えば、「今1年生で習っているこの分野は、3年生のこの分野の下地になる」などと、先を見せながら指導するように心掛けている。

課外講座の効果は大きく、特に数学では1年生7月の模試の結果が上昇した。基礎学力が定着して全体的に底上げされただけではなく、上位層の学力も高まったという。

「生徒からは、『普段の授業をより理解できるようにになった』『難しいけれど楽しい』といった声が多く聞かれます。考える力の育成を重視していることが、考えることを嫌がらずに主体的に学べている理由だと思えます。難関大の入試問題は考える耐性がないと解けませんから、こうした姿勢が身に付いているのはとても喜ばしいことです」(中村先生)

## 生徒が自分の限界を広げる 1年生夏休みの「宿泊学習会」

学力向上の取り組みで土台の一つとなるのが、1年生の夏休みに3泊4日で行う宿泊学習会だ。国語・数学・英語の習熟度別授業や自習を行い、翌朝テストをするのが基本的な流れだ。朝の散策の時間以外、授業や自習、テストなどで、1日10時間以上も机に向かう。進路指導部の中尾祐美子先生が話す。

「学習した内容についてすぐにテストをす

るのは、実践的な勉強により成果が表れることを実感させるためです」

テスト結果などを踏まえ、個々の生徒に合った学習方法を指導するのも特徴だ。同校にはコツと頑張る生徒が多いが、中には学習方法が不適切でなかなか成績が上がらないこともあるという。それを1年生のうちには是正し、その後の学習の効果を高めるためだ。

宿泊学習会では、グループに分かれて学習し、成績優秀なグループを表彰する。これにより競争意識が芽生え、グループの中で授業後などに自然と教え合う姿が見られた。

「個人ではなく、皆で一緒に学習する雰囲気をつくることで学習効果も高まったようです。それを実感してか、教え合う姿はその後の授業でも定着しました」(中尾先生)

宿泊学習会は、11年度が初めての試みだった。そのため当初は、「どうして私たちの学年だけ、こんなに勉強をしなくてはならないのか」といった不満の声も上がったそう。しかし、終えてみると、「こんなに勉強をしたのは初めて」と、ほとんどの生徒が大きな達成感を抱いていた。

「最初は嫌だったけれど、今ではもつとここで勉強したい」「夏休みの宿題も頑張りたい」といった感想が聞かれました。教師にとっては大変な部分もありましたが、苦しいけれども頑張り抜く、普段とは異なる生徒の姿を見られたのは大きなプラスでした。初回な

ので手探りの取り組みでしたが、学年団の反省会では『本当にやって良かった』と、生徒の成長を喜び合いました」(中村先生)

生徒がどこまでやれるのかを教師が知ったことで、その後の指導の指針が出来たという。

「私たちが思っているよりも生徒は柔軟に対応できる力があると感じました。生徒は自分の力を『これくらいだろう』と考え、自身で枠をつくってしまいがちですが、その枠を教師が外してあげると、どんどん伸びていくことを改めて実感しました」(長先生)

## 教師自身が成長して 「グローバルシティズン」になる

現在、学園が課題と捉えているのが、教師自身の成長だ。長先生は次のように話す。

「素晴らしい生徒を育てるには、特定の教師だけではなく、新人教育などで若手教師のスキルや意識も十分に高め、全ての教師が指導力を発揮する必要があります。誰でも応用できるマニュアルを整えることも大切ですが、それよりも教師自身が感性や志を持って教育に取り組むことが必要です。校長が日頃から言っています、教師がグローバルシティズンとして成長していくことが、今後、本校の教育をますます高めていくことにつながると考えています」

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年6月号指導変革の軌跡「東京都・私立吉祥女子中学・高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)